『話方研究』にみる松美佐雄の口演童話論
―秩序性による連想への誘い―

北川　公美子*

Sukeo Matsumi's Theory of Oral Fairy Tales in "Studies in Narrative Style"
—Inviting Association Through Orderliness—

Kumiko KITAGAWA*

Abstract

During the pre-war Showa period, as society was shaken by the approach of war, Sukeo Matsumi was a significant figure influencing children's consciousness through practical activities in childcare, education settings, and Sunday Schools. Matsumi developed his own method of oral storytelling, based on a theory that orderly structure guides listeners toward association, and created two types of original sheets for this purpose. Through this approach, Matsumi aimed to ensure listeners reliably understood and associated the storyteller's intent and imagery, and to imbue the content of the oral tales with meaning within the children's lives. However, this approach consequently deprived listeners of the truly free imagination they could have gained through oral storytelling.

Keywords : "Studies in Narrative Style", Sukeo Matsumi, Oral Fairy Tales, Showa Period, Association

1．はじめに

大正14（1925）年に創刊された『話方研究』は，口演童話家である松美佐雄（まつみ　すけお）が設立した「日本童話連盟」の機関誌である。内山憲堂は「松美佐雄の歴史は日本童話連盟の歴史と言っても過言ではない」[1)]と評しているが，同連盟の機関誌『話方研究』は，その松美が創刊から終刊まで全面的にその編輯を担ったものである。児童中心主義が謳われ，多くの児童雑誌によって童話・童謡が普及し，豊かな児童文化運動が展開された大正期に創刊され，日本が本格的に戦争体制に突入する昭和16（1941）年に終刊となった『話方研究』には，その揺れ動く社会状況を背景に，松美がどのような口演童話を目指していたかが語られている。

松美に関する先行研究として，唯一まとまった資料としては船津信章の『お話は太陽である：松美佐雄先生資料集』[*1]があるが，「松美が晩年に記事を寄せた『童話教育』と，松美の出身地である群馬ゆかりの人物による談話の二つが中心的な資料となっており，松美の口演童話家・児童文学者としての活動を相対的に捉えているとは言えない」[2)]ものである。また，口演童話史の一端を担う人物としてその概要を紹介されたり[*2]，大貫俊彦や浅岡靖央によって，口演童話家として本格的に活動する前の松美の姿については明らかにされている[*3]が，これらの先行研究では『話方研究』の内容までは対象とされていない。

『話方研究』から松美の口演童話に言及しているのは松山鮎子と中村美和子である。松山鮎子は『語りの教育の近代史―児童文化の歴史から現代の教育を問い直す』[*4]の中で松美を取りあげ，彼の動的概念から見た教育者と子どもの関係について論じているが，松美の口演童話そのものに対する言及まではなされていない。中村美和子の『昭和前期における口演童話の変遷―教育，ラジオへの展開と戦争協力』[*5]は，「口演童話を基軸として，それが教育と深く結びつき教室童話として展開し，さらにラジオという新しいメディアと結びつきながら国民教育を担う放送童話が展開された，当時の戦争協力に向けた国民意識の醸成のプロセスと構造を解き明かしている」[3)]。しかし，『話方研究』については「全冊を対象としておらず，入手・閲覧の可能だった号から抽出した範囲での分析にとどまっている」[4)]ため，同誌にあらわれた松美の口演童話に対する言及が十分とは言い難い。

これまで松美の口演童話について『話方研究』を対象に，幼稚園教育の視点から分析・考察を行い，松美が口演童話に「秩序性」を重視し「秩序立てられた童話の構成による深い内容理解と感性・感情（心の動き）が相まって，聞き手を童話に強く引き込み，同時に深い納得感を抱かせる」[5)]ことを意図していたことは指摘したが，その具体的内容までは明らかにできていない。また，「何とかお話の世界に戻つてもつと理想的な保育法はないも

*東海大学児童教育学部
ISSN 2758－4488

のか」[6] と考えた松美が「独自のシート」を作成していたことは明らかにしたが，その効果については「お話の表現が誇張的態度から自然表現に戻つて，嫌味のないいかにも童話教育家らしいお話が出来て，愈々虚名的童話家が声をひそむる」[7] という松美の言葉以上までは踏み込めず，その具体的な効果の考察が不十分であった。

本論では，『話方研究』を対象に，これまで明らかにできなかったこれらの点を含めて，松美の目指した口演童話とはどのようなものであったのか，その具体的な内容について考察していきたい。

2．口演童話を取り巻く状況

〈2･1〉普及による質の低下とその改善に向けた動き

明治期に巌谷小波・久留島武彦・岸邊福雄によってその地盤が作られた口演童話は，当時創刊された児童雑誌の販売促進を目的に全国を巡って講演が行われることで普及していく。特に久留島は，明治36（1903）年10月に巌谷を顧問として「お伽倶楽部」を組織し，第一回お伽会を開催し，以後，定期的にお伽噺（童話）の講演会を開き，また全国を巡って講演を行う一方で，「回字会」を主宰するなど，口演童話を組織的に普及させていった。*6 久留島は昭和16（1941）年に設立された「社団法人日本少国民文化協会」*7 の童話部会の幹事長にも就任しており，昭和期においても口演童話の中心的存在であった。

「「童話」と言えば読む童話ではなく話す童話のことを指した」[8] と評されるほど広く普及した口演童話は，子どもへの童話の話し方を模索していた教育界からも注目された。大正（1915）4年には東京高等師範学校に童話の話し方を研究･実践するための大塚講話会が設立され，以後，全国の師範学校に同様の団体が立ち上げられ，久留島らもそこに関わっていた。ただし，そうした口演童話との関わりの実際については教育界側から発信されることはほとんどなかった。それは，口演童話の形式が寄席などの大衆文化の流れを汲むものであり，非教育的であると捉えられ，教育という「聖域」においては安易に受け入れ難かったためと考えられる。*8 そのような教育界とは異なり，積極的に口演童話を受け入れたのが福祉的側面を有した宗教界であった。口演童話を行う場所として，幼稚園や小学校だけでなく，多くのキリスト教や仏教の日曜学校で行われたのである。松山鮎子は，「これらの宗教界で広まった口演童話は，日露戦争後，都市部・農村部の「貧困」が社会問題となり，児童の福祉を目的に日曜学校の活動がいっそう発展したことで，大正期から昭和期にかけて最盛期を迎えることとなった」[9] と指摘する。

しかしこのような爆発的な普及は，同時に口演童話の質の低下をもたらした。童話作家協会（大正15（1926）年設立）は「今日一般に用ひられる童話といふ言葉ほど，果てしなく広汎で雑多で，従つて不純な内容をもつものはあるまい。（略）実際には直接耳目の感覚的享楽に訴へる口演用童話が一般に童話の趣味を卑俗化するのは免れがたいことである。」[10]（下線引用者）（昭和元年）と指摘している。また，口演童話家を主な会員とする日本童話協会（大正11（1922）年設立）は「未だ真摯なる研究心を欠き，徒らに流行を追うて，無自覚な，独り善がりな，芸人的な態度に満足して居るものは多いのは，遺憾とすべきである。」[11]（昭和2（1927）年）と述べ，昭和期にはいっても卑俗的な状況にあることに危機感を抱き，その改善が急務と考えられていたのである。

〈2･2〉教育界の動向

それまで口演童話と距離をおいていた教育界であるが，昭和期にはいると変化がみられようになる。「大塚講話会」を立ち上げた東京高等師範学校の附属小学校から発刊された『教育研究』（明治37（1904）年4月創刊）には，昭和期にはいると，それまでまったくなかった「童話」や「実演童話」欄が登場する。昭和4（1929）年10月から「童話」欄が設定され小川未明の童話が掲載され，昭和6（1931）年1月からは長尾豊，水谷まさる，天野雉彦，浜田広介の童話も載せられている。そして，昭和7（1932）年2月からは欄の名称が「実演童話」と改められ，小野直と岩田野鳥の手による口演童話が掲載される。「童話」欄は「読む童話」として小川未明らの童話が載せられたが，「実演童話」欄には，その童話の意図・目的，そのための実演方法が詳細に記されている。「童話とは言へ，興亜教育，東亜新秩序の建設といふ時機に相応しい視野の広大なもので，教育上に示唆することも大なるものがある」[12] ため，口演童話についても「童話実演の趣味と価値とを方法的に教育的に一層研究」[13] することを求めたのである。

このように卑俗化する口演童話の改善への動きとともに，教育界においても，当時の社会状況を踏まえた教育のために，積極的な口演童話の活用が進められていったのである。

3．松美佐雄と日本童話連盟『話方研究』

〈3･1〉松美佐雄の略歴

松美佐雄（本名戸塚峻）の略歴は【資料1】に示すとおりである。

久留島との出会いの後，雑誌『少女』の編集者となると，その販売促進のために雑誌『少年』の編集者である大井冷光とともに全国を講演して回った。口演童話家でもある大井とは「近代日本における児童文学研究の組織＝団体の魁」[14] と評される「少年文学研究会」を発足させている。

松美自身は次のように振り返っている。

大正八年（一九一九）から大正十四年（一九二五）までは，幸いに，地方各地に多くの知己を得，また実演力も

認められて，西は広島，北は北海道までもかけ歩いていた。／しかしこの間に，子どもにきかせる童話の演出表現について，いろいろと疑いが出てきて，童話は，家庭と教室に還すべきものだという見地から，その理論を現実に移すため，大正十四年（一九二五）四月に，同志を糾合して，「日本童話連盟」を組織し，機関誌として「話方研究」を発刊した。[15]　（下線引用者）

実際に日本童話連盟を立ち上げる以前に，松美は日本童話協会（大正11（1922）年5月）設立にその準備段階から関わっている。上笙一郎は，同協会の功績として「口演童話家を主体とする児童文学・児童文化関係者の組織化」と「機関誌「童話研究」の刊行による児童文学・児童文化研究の深化と発展」を挙げている。[*9]その機関誌の創刊号に掲載された「特別会員名簿」で松美だけが唯一「童話講演家」という肩書が付され，また創刊から2年間，ほぼ毎号にわたって彼の童話の話し方に関する論考が掲載されている。しかし松美は「従来の「話し方」の発表と云ふものは，先輩巖谷，久留島，岸邊の三氏の輪廓から出ない」[16]と考え，巖谷らに追随するばかりの現状に疑問を抱き，自ら新たな口演童話の在り方を探り，その実践を展開するために「日本童話連盟」を立ち上げたのである。

〈3･2〉教育界の動向

「協会（日本童話協会：引用者註）は静的となつて動的の活動することがない（略）死んだ童話を研究することに努めて生きて行く童話の世界を見やうとせぬ」[17]という不満を抱いた松美は，「童話協会（日本童話協会：引用者註）以外に私は童話の話方を中心として全国に活動する童話講演家を集め社会的に連絡をとつて情操教育の為に働いたなら頗る意義ある事業としてどんなに響き合ふところの熱烈さを見ることが出来るかと思つて昨年十二月童話連盟の第一声を挙げて見た」[18]のである。

昭和3（1928）年5月の時点で，同連盟会員関係の日曜学校とコドモ会は101箇所で，北は札幌，南は鹿児島，満州まで及び，本部講師も全国に125名を擁している。[*10]同年9月の号には「会員諸氏の童心的努力空しからず，茲に約千名の会員を集むことの出来た」[19]と記され，昭和7（1932）年10月の号に掲載された支部数は146箇所[*11]，そして昭和8（1933）年3月の時点の会員数は1,139名となり，中華民国，朝鮮，台湾，満州を含めて全国に広がっている。[*12]

その会員に関する「日本童話連盟規約」の規定は，発足当時の「童話を創作するか又は講演するか若しくは研究する篤志家」[20]が，昭和3（1928）年に「童話を創作する童話家／童話を講演する童話家／童話，童謡を教室的に研究する教育家／童話，童謡を教化的に研究する宗教家／童謡音楽家／幼稚園関係の保育家／社会事業に関係する人々」[21]と改正される。それが昭和8（1933）年10月には「正会員は会員の紹介による外希望者を募ること」[22]となり，以後も終刊まで同様の規定となる。[*13]

これは，例えば，日本童話連盟と同時期の大正15（1926）年5月に設立され，日本童話連盟とも交流があり，上笙一郎が「童話教育運動の第一走者」と評した[*14]奈良県童話連盟の規定「県下ノ童話会，児童会日曜学校等童話ニ関係アル団体，若シクハ童話研究家ヲ以テ組織」[23]と比較すると，その違いは明らかである。奈良県童話連盟の規約は，日本童話連盟終刊の昭和16（1941）年までほとんど変わらないが，日本童話連盟の会員は幅広く多様であるとともに，明確に「教育・保育・福祉」の関係者を意図している。「松美の強みは，同じ教育界でも隔たりのあった幼稚園と小学校，また同じ幼児を対象としていながらも融和されていなかった幼稚園と託児所などを一元的に捉えたこと」[24]であるが，そのような教育・保育を含めて対象を包括的に捉えた松美の口演童話は，多様な聞き手とその教育のための活用が目指されたのである。

〈3･3〉機関誌『話方研究』

童話を「家庭と学校に還す」ための口演童話の在り方を追究する松美によって設立された日本童話連盟の機関誌『話方研究』は，大正14（1925）年4月から昭和16（1941）年9月までの16年以上にわたって180冊以上発刊されている[*15]。松美がその編輯のすべてを担い，口演童話に関するほとんどの論考は彼の手によるものである。同誌には「幼稚園・尋一から六・高一から二・日校及お話会」とその対象ごとにふさわしい月ごとの「お話表」を掲載したり[*16]，教室童話を研究するための「童話表」も載せられている[*17]。また「教室童話学」は日本で初めて『話方研究』で使われた用語である。

松美は同誌の中で「各地とも慰安童話から教育童話に，大会から教室に移り行く姿をみますと，余りに我等の主張の進展の速かなのに幸福を感ぜずには居られません」[25]と述べており，口演童話は「慰安」ではなく「教育」のためであることを目指している。それは【資料2】の日本童話連盟規約の目的の変遷が示すように，児童愛護・保護という用語が消え，教育の用語が強く押し出されていることからも明らかである。

このような多様な聞き手を対象に，教育を目的とした口演童話を行うにあたって，松美はどのようなことを目指したのであろうか。

4．『話方研究』にみる松美の目指した口演童話の実際

〈4･1〉構成観念の同一化と生活への浸透
―独自シートの活用のねらい

松美は，昭和4（1929）年3月の「日校及び幼稚園の最新の話方」の中で，独自に作成した二種類のシートを提示している。一つ目シート（【資料3・右】）では，話し手が事前に「講師の仮想」と「講師の態度」を記載することで，事前に童話の「内容観察」[26]を行うとともに自らの話す内容と話し方も想定することになる。そし

て，話し終わった後，聞き手の子どもに話をさせ，それを「児童の構成観念」に記載するのである。ここでは，その前頁までに掲載した「二つのお手玉」を例として，次のように説明している。

話を分解すると夫々の人物，動作を全く仮想におくものと連想からとるものとあることを信じます。／態度とか場面とかいふことが再生記憶によつて，このお花の下ごいふのは彼処にある家の庭だなと映じて来ることがあります。／静子と次郎といふ人物を画くについても，話す講師の再生記憶と，聞く児童の再生記憶とはどれ程相違つて居るか，又静子の姿が講師の画いて居る少女と，児童の胸にある少女ではどの位の相違があるかこの二人のものの画いて居るところがピタリと合つてこそお話の効果は尊重すべきと思ひます。／故にまづ凡でも講師はこの方面を記入しておき口演後に，児童の構成観念を聞いて記入出来ると非常に実演上の参考になると思ひます。／児童の連想をきくといふことは，講師がこのお話を終つてから／「面白かつたでせう，さア誰か先生とおなじお話，白いお手玉と赤いお手玉のお話が出来ますか」と聞きます。／すると児童の誰彼が手をあげるから，其者にお話をさせると必ず構成観念の異つたところがあるから之を記入するのであります。（略）／講師のお話の後に児童におなじお話をさせるといふことは彼等の消化力を見る上にもよいことで，又講師とすると一夜作りの有価値の童話を試みることが出来なくなるといふことで，実に好いことであります。[27)]

口演童話においては，話し手が仮想して話したことが，聞き手が想像するそれと一致することが重要であり，このシートによって，そのズレを明らかにし，そのズレをなくすように話す内容や話し方を自ら修正することを求めている。つまり，松美は，話し手の仮想する童話の内容を，確実にそのままの形で聞き手に想像させるべきと考えているのである。

二つ目のシート（【資料3・左】）は事後に記載するものとして，「観察･童謡（唱歌）･手技･絵画（文章）･其他」の項目が挙げられている。これはこの論考が「日校及び幼稚園の最新の話方」であるため，当時の幼稚園教育の保育項目「遊戯・唱歌・観察・談話・手技等」を踏まえたものと考えられる。ただ，幼稚園教育でもっとも重視していた「遊戯」が含まれていないのは，「日本の幼稚園が中心点を失つて歌はせて踊らせて全く子守のやうな保育をする」[28)] ことへの松美の批判的考えからと推測される。そして松美は，このシートは「児童のお話が終つてから，観察，童謡，手技，絵画，其他と連絡を保つて，お話効果を確実にいたす」[29)] ためと説明している。

一つ目のシートによって，子どもの理解と想像，及びそのズレを把握した上で，それを意識的に保育項目とつなげることによって，童話の教育的効果を確実なものとして定着させようとしている。口演童話を一時的な享楽や慰安としての「点」とせず，他の活動へ「線」にしてつなげることで，子どもの生活の中に位置づけ・意味づけ，それを口演童話の効果としているのである。

このような松美のシートは，例えば，奈良県童話連盟が作成した「実演童話批評カード」（【資料4】）と比較すると，その独自性がより明確に把握できる。このカードは「大阪童話教育協会案を参考に」[30)] 作成されたものであるが，童話の話し方そのものに対するチェックリストであり，口演童話というパフォーマンスの質をいかに高めるかということを意図したものである。一方の松美のシートは，子どもの生活における保育・教育として口演童話をどのように落とし込み意味づけるかを目指している。松美の口演童話が保育や児童福祉関係の実践者に受け入れられたのは，このような口演童話の在り方が，生活を基盤として総合的に考える保育・養護の捉え方と合致したからと考えられる。

〈4･2〉秩序性による連想への誘い

話し手が意図し仮想したことを的確に聞き手に理解させイメージさせるため，話し手が想定する聞き手の「想像」のためには，童話そのものの内容と話し方が重要になってくる。

松美は，日本童話協会にいた頃から童話を話す際には改作が必須と考えていたが*[18]，それについて次のことを述べている。

童話の世界になると，小国民(ママ)教育といふ背景があるのだから，この背景の前に立つて聞かせることの出来ない童話は，童話であつて童話でないのである。故に教材童話として話の内容を包むところの心理的條件として，／（一）完全なる秩序性を含有するもの。（二）最善最良の聯想を誘導せしむるもの。（三）崇高豊富なる想像を惹起せしむるもの。／を選擇して国民精神の根底をその幼少期に於て確実に培養せねばならぬのである。[31)]

（下線引用者）

つまり教育としての童話は改作をしてでも「秩序性」を持たせ，話し手が仮想する最善最良の「連想」へと聞き手を誘うことが必要と主張し，「桃太郎」を例に挙げ，その具体的な仕組みについて次のように説明している。

桃太郎はよく議論の種をまく，曰く軍国主義，曰く侵略主義，私はそんなことを思つて居らぬ。／この話で最初に研究する事はお婆さんの拾つた桃の実の大きさである。お婆さんが洗濯して居るところへ桃が流れて来た。が然しお婆さんは驚いて腰もぬかさず持つて戻つたところを見ると大きいには大きいが巨然たるものでなかつたと信ずる。／持つてもどつてお爺さんを待つ間に驚くべき巨大さを示すといふところに童話としての働きがあるといふものだ。／「おや。……マァ，驚いた。……」／「■。

何をいつて居るのだい。」／「桃が持つて来た時よりもおほきくなつたのですよ」／「桃が……や之はおほきい」／之からお爺さんと桃をきるのであるが，最初から桃が巨大なものであるとするとお婆さんが持つてもどつたかどうかは疑はしいものである。／次いで桃太郎の育つた村である，この村は砲兵だの工兵だのといつて子供を集めて戦ごつこをする程賑かな村でなかつた。なるほど桃の花が咲き実のなるほどの暢かさはあつた。其暢かさの村とすると，隣り近所がいかにも寂しかつた。／桃太郎はこのことに疑ひを持つて育つた子供である，長ずるにおよび，其訳をお婆さんから聞いた。海の彼処に鬼ヶ島があつて度々鬼が村に来て荒すので村も人手がすくなくなつて了つたと……。／「ヨシおほきくなつたら征伐する」／之が桃太郎の鬼ヶ島征伐の動機である。（略）／各合理的に組み立ててこそ始めて教材童話としての価値があるのだ，日本には之までこの真価値を発見する教育家がなかつたのだ。／この童話改作法は敢て猿蟹合戦，桃太郎話ばかりでない，真の童話を知らない作家のものには数多くある。殊に際立つてあるのは大阪市の各幼稚園の保姆の作を集めた『幼児に聞かせるお話』に多い。／桃太郎話に現代化させねばならぬところがある。夫れは船である，船に保護色を塗らねば鬼ヶ島につくことが出来ない。／以上を綜合すると完全な桃太郎話として構成することが出来る。[32]　（下線引用者）

本来であれば耳で聞く桃の大きさや船の色などは，聞き手が自由に想像し，自分自身でそのイメージを広げていくものであるが，上記のような綿密に組み立てられた完全なる秩序性をもたせることで，聞き手の理解とイメージを話し手の想定するそれと同一にさせようとしている。つまり，このような秩序立って改作された童話は，聞き手自ら自然とそのような想像，即ち「連想」するように作るべきと主張する松美は，聞き手の全く自由な想像を認めていないのである。

上記の論考は大正14（1925）年10月のものであるが，秩序性によって連想に誘う口演童話を目指す松美の信念は，以下のような記述にもみられる。

「さるとかに」（13巻10号，昭和12（1937）年9月）
国語読本二の五「サルトカニ」のお話をなさるについて，二三の御注意をいたしておきたいと思ひます。（略）／第十八頁のサウシテのところでは挿絵の説明を加へ／「手桶に水をくんで来て。たねの上にかけながら」と言う言葉を入れ／「早くめを出せ。早くめを出せ」／といひましたになるのでありますが，お話ではこの「たね」の上に水をかけそそぐ時，静かにまるく干杓をまわしながら「早くめを出せ，早くめを出せ」といふことであります。／柿の種をいたはるといふ気分から，頭の上から「ざぶ」とかけず，まわりから静かにかけて行くといふ態度をはなれては不可ません。（略）／第二十二頁に／「かには大けがをして泣きました」／とありますが，この大けがをしたかにが第二十八頁では／「かには，はさみでさるのくびをきらうとしました」／とあるのはどうも辻褄の合はぬ話であります。／大けがをしたかにが泣いて居るところへ，蜂，臼，栗が来て，その日の内にさるをこらす相談をしたのですから，さるの首をきらうとする程度に，かにの大けがはなほつて居ない筈であります。／国定国語読本もこんなことを平気でやつて居るのです。（略）／意あつて文字足らずといふのが，読本童話の欠点であります。[33]

本来童話で語られない部分は，それぞれ聞き手の自由な想像によって補い，そこに聞き手独自の思い描く想像世界が構築される。しかし，この徹底した秩序性によって再構成された童話は，話し手が意図する連想へ誘い，聞き手の想像の幅と方向性を誘導してしまう。それによって，話し手が意図した，その口演童話によって聞き手に伝えたい中心観念へとたどり着かせようとしているのである。このような童話の作り方・話し方は，聞き手に真の意味での自由な想像を奪うものである。しかし松美は，聞き手自身の中から湧きおこる自由な理解とイメージで連想して童話を味わわせるとともに，どのような話し手によっても口演童話としての一定の効果を出すために「連想」という仕組みを考えたのである。

ちなみに，久留島は「その言葉はわからぬけれども，その調子，その取扱ひ方が，直接子供の心に感ぜしめることが出来る。（略）所謂智識的には理解できないけれども，子供の心には感じ得ることだと思ふ。」[34] と述べ，言葉や材料を組み立てて語るよりも，心で語り，声の響きによって子どもの心に感じさせることを重視している。このような声の響きは岸邊も重要視しており，久留島は「あの響きをはたらかし得る岸邊君が実に羨ましい」[35] と述べている。

このようにみると，秩序性によって誘う連想による口演童話の在り方は，松美独自のものであったと考えられる。

松美は昭和16（1941）年1月に「共栄圏と童話の使命」と題して，次のような論考を載せている。

共栄こそ童話の生命である。生命といふより寧ろ使命であらう。（略）／童話に共栄なくして何がある。所詮之までは只その言葉を使はなかつたにすぎない。過去が使ふことを忘れて居たのだ。思ひ浮べることの出来ない程，桜咲く我が日本は輝かしい共栄の世界であつたのだ。／ところが此の共栄といふ二つの姿が，ぽつかり世の潮流の上に浮いて出た。そして然も夫が南進の姿を見せて居た。／私たちは此共栄の姿を，一生の大事として来た童話の上からもしつかりと掴んで，将来此の共栄圏内に立つて大きく呼吸する子供の胸にがつちりと投げ込んでやらねばならぬ。即ちその仕事が現代童話としての使命で

ある。／何といつても従来の童話は，国民共栄といふ衣をきて居たにすぎなかつた。又夫でよかつたのだ。日本の子供は日本の子供でもよかつたのだ。ところが今日は左様は行かぬ。日本の子供は亜細亜民族の模範生となり指導者となり，そして他日共栄圏の太い線上に立たせて，活躍なさねばならぬ。／共栄の圏線が広まると共に，童話の領域も広まつて来た。国民童話が民族童話となり，民話となつて，日本人のみの抱いて居る大和魂が，やさしい母親のやうに東洋民族の卵をあたためてやらねばならぬ。／さてさきに共栄は童話の生命であるといつたが，童話の内容から見ることは，後の仕事として先づ話し行く形式からいふと，子供が楽しく相寄り相集るといふところにすでに共栄としての精神がある。（略）／要するに集つた人々を幸福にすることが日本古来からの童話の目的で，即ち共栄精神といふものは伝統的であつた。ことに桃太郎の如きは，共栄精神の中心であつて，又古来から叫んで来た興亜南進の姿でもあつた。／日本といふ桃太郎が，満州といふ犬をつれ，支那といふ猿を伴ひ，泰といふ雉子を飛ばせて南諸島にはびこるヤンキイの鬼を退治することが，童話といふ子供未来記に伝つて居たのだ。が誰も彼も足元の鬼ケ島ばかり考へて居て，遥か南洋の鬼ケ島を窺ふことが出来なかつた。（略）／日本ラインが桃太郎の出生地でなく，まさにこの東洋日出づる国が桃太郎の出生地であり，又四国の高松に鬼ケ島があるのではなく，遠く太平洋の(ママ)あなたの島々に鬼ヶ島はあつたのだ。／つまりいふと，日本は亜細亜民族のために，夫等の島々にはびこる悪鬼どもを悉く追ひ払つて，共栄圏を確立すべき立場にあるのだ，其為めの童話精神は共栄圏内の照明であり，活動である。／全く童話といふものは，国民の共栄を継承させるために生れたものであり，国民の共栄を把握するために聞くものであり，其の共栄の伝説をさせるために蒐集編纂するものである。／実に今日からでも遅くはない。童話精神を共栄の本体に還元して，以て将来の共栄圏に駈け進まふとする日本の子供のために，民族共栄のよき童話を与ふるべきである／即ち此処では国民共栄に関する童話をあげて，其童話を南洋諸島へ迄もひろげて行きたい，そこで又東亜共栄圏を産み出すことに努力したいと思ふ。[36]

（下線引用者）

一度に大人数を惹きつける口演童話において，松美の提唱する話し方は，話し手が意図する中心観念を含めて聞き手に自発的に童話を味わわせ，すべての聞き手に同一の理解とイメージを共有させることの危うさがある。しかし，日本だけでなく東洋やアジアなどさまざまな子どもたちの意識を統一化させ共栄を目指すことが幸福と考えていた松美は，ここに主張するような一方的な価値観を無意識に植えつけられることでもたらされる，偏った意識形成の先にある危険性まで考えが及んでいなかったのである。

5．おわりに

松美は，『話方研究』の最終号（17巻9号，昭和16年（1941）9月）の「廃刊か。更生か」の中で，次のように述べている。

よく或る人たちは「松美は孤立して居る，敵が多い」といつて居ります（略）／久留島会長の「同士に告ぐ」を読んで見ますと／「今や，国家は一人の優れたる専門(ママ)家よりも，寧ろ百人の真の童話をする精神の体得者の出現を，要望してゐるのである」／といつて居りますが，此言葉は私が十七年前にいつて童話連盟を創設したのであります。／安倍氏なども此頃童話といはず「お話し」といふといつて居りますが，「お話をする」「之はお話だ」といふ理論を，実際は連盟が十年も前から使つて居たのであります。／之は私が，先輩久留島氏に反抗するためにいふのでなく，又親友安倍氏と議論するためにいふのでもなく，事実を事実として，日本童話連盟の実態を物語るのであつて，会員諸氏の共にうなづけることと思ふのであります。／（略）茲に情報局文部省の創設せる，日本少国民文化協会の創立委員となり，其童話部会の幹事となるのでありますから，連盟はより多く確的に，更生する光りと喜びを受けたことになるので，会員諸氏も，此更生を嘆美していただけると思ふのであります。（略）／私は十七年間苦悶して得たる体験と，研究と錬成とによつて沸き立たんとする童話愛をもつて，皇道精神に立脚せる連盟千余の会員を力に，先輩久留島氏を助けて，日本少国民文化協会童話部会へ，全国万の童話人を送りて興亜大聖業完成のため児童文化に働かうとするのであります。[37]

日本童話連盟としての松美の活動は，当時の口演童話界において異質的であったことがうかがえるが*19，そのような状況だったからこそ，独自の口演童話を推し進めてしまったとも言えるのである。

同じ最終号の「最後の編輯だより」には，次のように記されている。

日本少国民文化協会は，情報局と文部省がのり出してやる仕事でありますから，真に国家将来の児童文化を進展させるため皆様も是非御入会下さい。夫が又銃後に働く童話人の愛国的の行為であります。／何にしても文化協会の童話部会へは一万人会員を集めないと，政府の考へて居る児童文化の進展を見ることが出来ません。会員を一万にする迄，私は足をするこぎにして，全国各地をかけまはる覚悟であります。／ですから私にとると廃刊の辞が創刊の辞であります。／要するに童話人は，私設鉄道から省線鉄道へ乗り替へるので，乗車券へ愛国の鋏を入れて貰へばよいのであります。[38]

前述の「廃刊か。更生か」の文面と合わせて見ると，松美は，久留島を幹事長とする日本少国民文化協会童話部会に統合されても，これまでの自分の信念を貫こうとしているように読み取れる。それは，この「最後の編輯だより」の隣の奥付の上部分に囲い枠に掲載された以下の記述からも感じられる。

「日本話方文化研究所」 松美佐雄
話方の研究は，幅が広く，奥も深い。連盟十七年の研究ではまだ足りない。／幼稚園では話方が上達せぬと，保育が完成せず，国民学校では話方が身につかぬと，学課がすすまない。／ヨミカタは柱である。柱ばかりでは家は建てられぬ。話し方といふ屋根を拵へなければならず，壁もぬられなければならぬ。／私はまだ〳〵足りない話方の研究に進んで行きたいと思ふ。／勿論日本少国民文化協会の事業に添つた特殊の研究で，国防国家の文化材(ママ)を，より多く精神的にかみくだいて，児童に與ふることを目標として研究を深めて行く。／研究所はいづれ置くことにするが，当分の間，時々出張さきの幼稚園り(ママ)国民学校なりの講堂を実習所に使はせて貰ふ。／研究同人は三百名として，研究発表は季刊雑誌八十頁（定価一圓位）として配布する。[39)]

17年間の日本童話連盟での実績を日本少国民文化協会の活動につなげるというよりも，まだ足りないとしてさらに推し進めようと考えている。これは，松美が日本少国民文化協会にただ迎合されるのではなく，そこにおいてもなお自分の道を目指そうという決意表明とも捉えられる。

松美の強制とも言えるような強力な口演童話は，戦争に向けて国民の意識統一を図ろうとする当時の社会に適合したものであったろう。言い換えれば，松美の目指した口演童話の在り方を明らかにすることは，当時の国民意識形成の実態を解明することであり，実際の教育・保育，児童福祉の実践の場でどのように展開され，それが子どもたちの意識や世論にどのように浸透していったのかを明らかにすることであり，戦時下における保育・教育の在り方を検証することにつながると考えられる。

なぜ日本が戦争と言う方向に舵を切ったのかを明らかにするには，国の政策レベルだけでなく，国民意識や教育など，さまざまな視点からの実態を明らかにし，多様な角度からの検証が必要である。

今後は，松美の目指した口演童話が，戦時下における子ども（国民）の意識形成にどのように作用したのかについて，さらに具体的に明らかにすることをとおして，当時の保育･教育の在り方を検証していきたいと考える。

【資料１：松美佐雄・略歴】

※船津信章『お話は太陽である』（有信館群馬支部，2022）の「年譜」より抜粋及び加筆修正

年号	内容	数え年
明治 12	松美佐雄（本名峻）11 月 25 日（群馬県群馬市）赤城村津久田に生誕	1
明治 26	小学校高等科卒業	15
明治 33	兵役服役	22
明治 34	父親の退職（小学校長）にて一家上京	23
明治 36	東京春日町陸軍效果学校卒業	25
明治 38	童話を書きはじめ『少年世界』に発表	27
明治 39	「人形士官」が『少女世界』に掲載	28
明治 40	信濃毎日新聞記者（長野市）となる	29
明治 41	長野公演・城山館にて童話会を開催	30
明治 42	久堅町精美堂発行「はがき文学」編集者となる（東京へ戻る） 「東京お伽学校」の巡回童話講師となる	31
明治 43	かねと結婚 「はがき文学」をやめて作家生活に入る	32
明治 44	長男正宏誕生	33
明治 45 大正元	時事新報社に入り『少女』の編集者となる	34
大正 2	大井冷光と協力し「少年文学研究会」を結成	35
大正 3	長女多香子誕生	36
大正 7	時事新報社を退職し、童話講演家として独立	40
大正 11	「日本童話協会」設立に尽力	44
大正 14	「日本童話協会」を脱退し「日本童話連盟」結成 『話方研究』発刊	47
大正 15 昭和元	和田弁瑞師に協力して「音羽幼稚園」創立	48
昭和 2	次女松枝誕生	49
昭和 4	長男正宏病死 『愛らしき幼児お話集』出版	51
昭和 9	音羽童話会創立（護国寺音羽幼稚園内） 貞静幼稚園保姆養成所で保育童話の研究と指導にあたる	56
昭和 10	長女多香子病死 三女リラ誕生	57
昭和 16	『話方研究』廃刊	63
昭和 19	千葉県天羽町湊へ疎開 保育事業開始	66
昭和 23	次女松枝病死	70
昭和 24	童話集『バタをつくった蛙』出版	71
昭和 27	港町保育園と町立保育園が合併した園を運営、夫人かねが主任保姆 合同記念童話大会を開催 松美・安倍先生の感謝の会	74
昭和 32	君津病院へ入院 『はがき童話集』第１集出版	79
昭和 33	『はがき童話集』第２集出版 三女リラ病死	80
昭和 35	金婚式 『金婚童話集』出版	82
昭和 36	死去 12 月 13 日	83

【資料２：日本童話連盟規約・目的の変遷】

年・月	巻・号	目的
大正 14・4	1・1	本連盟は童話を中心とせる社会教育の普及を計るを目的とす
大正 15・10	2・7	本連盟は童話を中心とせる社会教育の普及を計り以て児童保護事業の完成を期するを目的とす
昭和 2・4	3・3	本連盟は童話を中心とせる社会教育の普及を計り以て児童愛護事業の完成を期するを目的とす
昭和 4・1	5・1	本連盟は実演童話を中心に現代社会教育の普及を計り以て児童愛護事業の完成を期するを目的とす
昭和 7・3	8・4	本連盟は童話を中心に現代社会教育の普及を計り、以て児童愛護事業の浄化完成を期するを目的とす
昭和 11・2	12・3	本連盟は童話を中心に現代児童教育の普及を計り、以て躍進日本の児童及び父兄母姉に忠君愛国の精神を鼓吹するものとす。
昭和 11・3	12・4	本連盟は童話を中心に、現代児童教育、社会教育の普及を計り、以て躍進日本の児童及び父兄母姉に忠君愛国の精神を鼓吹するものとす。（※太字・フォント大）
昭和 13・12	15・1	本連盟は国民童話を中心に、現代児童教育、社会教育の普及を計り、以て躍進日本の児童及び父兄母姉に忠君愛国の精神を鼓吹するものとす

※下線は変更箇所

お話の題（二つのお手玉）　□演時間約十五分時

講師の假想	講師の態度	兒童の構成觀念
(1) 靜子の家、庭、さくらの木	(1) 靜子の態度を考へてをく	(1)
(2) 枝の間をくぐるお手玉	(2) 次郎といふものを如何に表現すべきかを考ふ	(2)
(3) 椽側をかけのぼる次郎の姿	(3) お手玉とお花	(3)
(4) 夕暮のさびしい村	(4) 花のお庭のこと	(4)
(5) 地の上はおちて居た赤いお手玉	(5) 烏の擬聲	(5)

時	項目	（この二つの表は未定稿です段々に研究して完成します）
	觀察	お手玉に使用する豆類について説明いたします。 櫻の花について説明いたします。 色についても觀察することにいたしませう。
	童謠（唱歌）	櫻の童謠を調べて敎へます。 お手玉に使用する歌謠についてよいものを敎へます。
	手技	女生はお手玉を作らせること
	繪畫（文章）	男生に櫻の花を畫かす お手玉を畫かす お花がお手玉の上に散るところなどを想像させて作文につくらせたいと思ひます
	其他	實行方面についても「ええ、モウ仕ません」とハツキリいふところなどは次郎がどんな態度でどんな言葉でいつたとか誰が次郎の眞似をしてみて下さいなどと眞似させることもよいと思ひます。

【資料３：松美佐雄・独自作成シート】

實演童話批評カード　批評者

日時	場所
話題	所要時間　話者
聽衆の年齢及人員	

種目	批評欄
內容	話材 程度 分量 難易
現表	話の組立（枕 本話 結 山、谷）
現表	音聲（強 高 調 速 低 弱 子 度）
現表	言葉（難易 アクセント 癖）
現表	話術（說明 會話 擬聲音）
現表	態度（位置 口の閉 眼の配 表情 頭 肩 兩手の 足 服裝 登降壇）
現表	補助音樂（レコード うた）
兒童に與ねたる印象	
總評	
備考	

この批評カードは大阪童話敎育協會案を參考にして作つてみました。六月の例會で一度用ひてみました。更に二三回やつてみて、惡い点は訂正して、このカードを作つてみることにいたします。

【資料４：奈良県童話連盟・実演童話批評カード】

【引用文献】

1）内山憲堂『日本口演童話史』博文社, 昭和47（1972）, p.53
2）大貫俊彦「口演童話家・松美佐雄の文学活動―『二六新報』関連記事を手がかりに―」，木更津工業高等専門学校紀要，48号，平成27（2015），p.4
3）北川公美子「書評　中村美和子著『昭和前期における口演童話の変遷―教育，ラジオへの展開と戦争協力』」，幼児教育史研究，19号，令和6（2024），p.53
4）中村美和子『昭和前期における口演童話の変遷―教育，ラジオへの展開と戦争協力』, ひつじ書房, 令和6（2024），p.75
5）北川公美子「大正期の幼稚園教育における童話の「話し方」に対する着目―雑誌『話方研究』の松美佐雄に着目して」, 東海大学短期大学部紀要, 54号, 令和2（2020）, p.7
6）松美佐雄「日校及び幼稚園の最新の話方」，話方研究，5巻3号，昭和4（1929），p.26
7）松美佐雄「日校及び幼稚園の最新の話方」，話方研究，5巻3号，昭和4（1929），p.34
8）内山憲尚編『日本口演童話史』, 博文社, 昭和47（1972），p.13
9）松山鮎子『語りと教育の近代史―児童文化の歴史から現代の教育を問い直す―』, 大学教育出版，令和2（2020），p.14
10）童話作家協会編『日本童話選集』第一輯，丸善，大正15（1926），pp.1-2
11）日本童話協会編『日本実演童話集2』，隆文館，昭和2（1927），序p.2
12）「大塚茶話」，教育研究，514号，昭和15（1940），p.112
13）「大塚茶話」，教育研究，435号，昭和10（1935），p.176
14）上笙一郎「少年文学研究＝児童文学研究組織の初発」，日本児童文学研究史，港の人，平成16（2004），p.319
15）松美佐雄「童話五十年の歩み」，金婚童話集，金婚祝賀会，昭和35（1960），p.5
16）松美佐雄「童話の仕方の実際（一）」, 童話研究, 第1巻3号，大正11（1922），pp.22-23
17）「日本童話連盟本部記事」，話方研究，1巻1号，大正14（1925），p.21
18）「日本童話連盟本部記事」，話方研究，1巻1号，大正14（1925），p.21
19）「会員の分布数」, 話方研究, 4巻9号, 昭和3（1928）, p.49
20）「日本童話連盟規約」, 話方研究, 1巻1号, 大正14（1925），頁数なし
21）「日本童話連盟規約」, 話方研究, 4巻4号, 昭和3（1928），頁数なし
22）「日本童話連盟規約」, 話方研究, 9巻11号, 昭和8（1933），頁数なし
23）「奈良県童話連盟規約」, 童心, 1巻1号, 昭和2（1927）, p.9
24）北川公美子「昭和初期の幼児教育と口演童話のかかわり」, 東海大学児童教育学部紀要, 2号, 令和5（2023）, p.45
25）松美生「編輯だより」, 話方研究, 4巻5号, 昭和3（1928），p.49
26）松美佐雄「日校及び幼稚園の最新の話方」，話方研究，5巻3号，昭和4（1929），p.33
27）松美佐雄「日校及び幼稚園の最新の話方」，話方研究，5巻3号，昭和4（1929），p.33
28）松美佐雄「日校及び幼稚園の最新の話方」，話方研究，5巻3号，昭和4（1929），p.26
29）松美佐雄「日校及び幼稚園の最新の話方」，話方研究，5巻3号，昭和4（1929），p.34
30）「実演童話批評カード」，童心，73号，昭和8（1933），p.1
31）松美佐雄「教室童話学序論（二）」，話方研究，1巻3号，大正14（1925），p.7
32）松美佐雄「教室童話学（二）」，話方研究，1巻5号，大正14（1925），pp.1-15
33）松美佐雄「さるとかに」，話方研究，13巻10号，昭和12（1937），p.24
34）久留島武彦『童話術講座』日本童話協会, 昭和3（1928）。引用は『大分県先哲叢書　久留島武彦　資料集　第三巻』（大分県立先哲史料館，平成15（2003），p.361
35）久留島武彦『童話術講座』日本童話協会, 昭和3（1928）。引用は『大分県先哲叢書　久留島武彦　資料集　第三巻』（大分県立先哲史料館，平成15（2003），p.385
36）松美佐雄「共栄圏と童話の使命」，話方研究，17巻1号，昭和16（1941），pp.4-6
37）松美佐雄「廃刊か。更生か」，話方研究，17巻9号，昭和16（1941），pp.2-3
38）松美佐雄「最後の編輯だより」話方研究，17巻9号，昭和16（1941），p.18
39）松美佐雄「日本話方文化研究所」話方研究，17巻9号，昭和16（1941），p.19

【注】

＊1 船津信章『お話は太陽である：松美佐雄先生資料集』有信館群馬支部，平成4（1992），非売品

＊2 内山憲堂編『日本口演童話史』（博文社, 昭和47（1972））では，巌谷小波・久留島武彦・岸邊福雄・天野雉彦・芦谷重常に続いて項目が立てられ，その略歴と業績について説明されている。

＊3 大貫俊彦は「口演童話家・松美佐雄の「小説家」修行時代1」（木更津工業高等専門学校紀要，49号，平成28（2016）），「松美佐雄の口演活動：『信州新聞』，『信濃毎日新聞』時代周辺」（文芸と批評，12巻1号，文芸と批評の会，平成27（2015）），「口演童話家・松美佐雄の文学活動：『二六新報』関連記事を手がかりに」（木更津工業高等専門学校紀要，48号，平成27（2015）），「松美佐雄の長野時代：『信濃毎日新聞』掲載作品に関するノート」（大阪国際児童文学振興財団研究紀要，34号，2021），浅岡靖央は「松美佐雄と南部真一：ある口演童話家の誕生」（大阪国際児童文学振興財団研究紀要，27号，平成26（2014））で，口演童話家として活動する前の松美の一端を明らかにしている。

＊4 松山鮎子『語りの教育の近代史―児童文化の歴史から現代の教育を問い直す』, 大学教育出版, 平成22（2010）

＊5 中村美和子『昭和前期における口演童話の変遷―教育，ラジオへの展開と戦争協力』, ひつじ書房, 令和6（2024）

＊6 詳細は，北川公美子「明治期の幼稚園教育における口演童話に関する一考察―口演童話の三大家とのかかわりを中心に―」，東海大学短期大学部紀要，52号，平成31（2019）参照。

＊7 戦時体制で児童文化の諸団体が統合され，11部会で構成された団体。口演童話の諸団体は童話部会として一元化された。同部会には，ラジオで活躍したメンバーが多く含まれている（中村美和子『昭和前期における口演童話の変遷―教育，ラジオへの展開と戦争協力』，ひつじ書房，令和6（2024），p.221）。

＊8 詳細は北川公美子「大正期の幼稚園教育における口演童話とのかかわり―保育方法としての「話し方」への着目」，東海大学短期大学部紀要，53号，令和2（2020）参照。

＊9 上笙一郎は「日本童話協会と「童話研究」」（『日本児童文学研究史』，港の人，平成16（2004））の中で，『童話研究』の功績について次のように記している。「その第一は，〈口演童話家を主体とする児童文学・児童

文化関係者の組織化〉であり，その第二は〈機関誌「童話研究」の刊行による児童文学・児童文化研究の深化と発展〉であり，その第三は〈「綜合童話大講座」と『日本実演童話集』という二つの指標的な編集著作物を出版したこと〉であり，その第四は〈児童文学・児童文化研究者の次代を育成したこと〉であり，そしてその第五は，上記の営みのなかから〈戦前期における最大の児童文学研究者たる蘆村＝蘆谷重常を出現せさしめたこと〉であると言って置こうか。」(p.383-385)。

＊10「連盟会員の関係せる日曜学校とコドモ会」(p.53-60)「日本童話連盟本部講師」(p.61)(『話方研究』4巻5号，昭和3（1928))

＊11「日本童話連盟全国支部名簿」，話方研究，9巻11号，昭和7（1932)，pp.56-64

＊12「日本童話連盟の会員数」，話方研究，9巻5号，昭和8年（1933)，p.64

＊13 昭和10年10月に「正会員は会員の紹介による外研究者を正会員となすこと」(11巻11号)，昭和11年4月に「正会員は会員の紹介による人々を正会員となすこと」(12巻5号)，昭和12年12月に「正会員は各会員の紹介によつて二年以上会員たる人々」(14巻1号）となり，これが終刊まで継続する。

＊14 上笙一郎「関西児童文化史　稿・52 〈童話教育運動〉の第一走者―奈良県童話連盟―」，日本古書通信，903号，平成16（2004）

＊15 創刊から終刊までのうち，昭和15（1940）年に発刊されたと思われる16巻11号・16巻12号についてはその発刊の有無を含めて未確認であるが，それ以外の確認できた184冊を本論での対象とした。

＊16 例えば「8月お話表」が『話方研究』11巻8号（昭和10（1935）年7月，p.45）に掲載されている。

＊17『話方研究』10巻8号（昭和9（1934)）年7月，pp.56-59）には，童話表が載せられ，その活用目的等が説明されている。

＊18「童話は時の背景と云ふものゝ前には改作するのが当然と云ふべきであらう。／只注意すべきはこの改作のために童話の精神を失つてはならぬ。往々自分の手振り身振り擬声をいれて，大に得意を発揮しやうとするために其精神を失ふことがある。かう云ふ人は童話講演家の仮面をかぶつた落語講談師であると云ふことが出来る。／（略）尚一言すべきは，読む童話を話す童話にするには如何なる程度，如何なる形式に改作すべきであるかと云ふことである。之は先輩三氏によるべきでない。自己の個性から来るところの創造の力を待つべきである。」(松美佐雄「童話の仕方の実際（一)」，童話研究，1巻3号，大正11（1922)，pp.28-29）ここでの先輩三氏とは巌谷・久留島・岸邊である。

＊19 松美は昭和4（1929）年6月の『話方研究』の「編輯の後に」に，次のような記事を載せている。「久留島先生の二十五周年祝賀会が六月十六日帝劇(ママ)てあげられました。発起人を全童話界から全国的にとるのが先生の偉大さを示すことと思つて居りましたが，どういふもの童話連盟には通知もありませんでした。／よつて連盟ではこの秋に先生をお招きしてユツクリと心からなるつどゐの内にお話を承りたいと思つて居ります。（松美佐雄「編輯の後に」，話方研究，5巻6号，p.56）

【付記】

- 本論は，「国文学　言語と文芸の会　2024年度大会」の口頭発表「昭和初期の口演童話と松美佐雄」をもとに大幅な加筆・修正を加えたものである。
- 本論は，令和4年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号22K02557，採択期間：令和4～7年度）「昭和初期国語教育実践における「読み」の在り方に関する実証的研究」の研究成果を反映したものである。